星を統べる者

長良金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を統べる者

【Ｎコード】

Ｎ３３６１Ｌ

【作者名】

長良金

【あらすじ】

気がついたらＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界にいた主人公がせっかくだから楽しもうと前向きに生きていくお話。主人公最強。

第1話

気がつくとそこは草原だった。

「え？ なにこれ？」

なんで俺はこんなとこにいるんだ？

辺りを見渡してみる。

うん、見事なまでに草しかねぇな。

ふむ。とりあえず落ち着け俺。落ち着いて、いままでのことを思い出すんだ。俺はたしか……ってあれ？ 思い出せない？

「俺にどうしろと？」

しばらく茫然としたあと我にかえった俺は現状を確認することにした。すると、足元に小さな鞄が置いてある。

草に隠れて気がつかなかったみたいだ。

期待を胸に中を見てみると何かが書かれた紙切れと林檎のような果物が一つだけ入っていた。

期待していただけにかなりがっかりしたが、こうしていてもはじまらん。と、いうわけで紙切れを見てみることにした。なんかこれ殴

り書きっぽいな・・・。すごく読みずらいんだが……。

『異世界・悪魔の実・能力：惑星掌握・対価：記憶喪失』

えっと、ようするにここは異世界でこの林檎モドキは悪魔の実、しかも惑星掌握ってことは星を操れるようにでもなるってことだよな。きっとホシホシの実とかいう名前にちがいない。で、対価として記憶を失ったと。それにしても対価って、もしかして悪魔と契約でもしたのか？……記憶をなくす前の自分はなにを考えてたんだ？

それにしても知識とかは残ってるみたいなんだよね。なぜか悪魔の実とかも知ってるし。ここってワンピースの世界だよね？

異世界ってのはスルーだな。もとの世界がどんなのかわからんから実感ないし。

よし！現状はだいたい把握したし、前向きにこれからのことを考えようか。とりあえず林檎モドキ食って能力を試してみよう。しっかしこの実、ただの林檎にしか見えないんだが・・・

「確か悪魔の実ってクソまずいんだよな……。…？……！？ウッ！！ガフッ……」

フゥ……なんとか食ってやったぜ……。なんか青汁みたいだった。

悪魔の実も食ったしさっそく試してみよう。ヤベーな、ワクワクがとまらねぇぜ！テンション上がってきた！

星を掌握出来るんだから自然現象も操れるはず。と、いうことで自

然系の能力が使えないか試してみた。

「すげぇな、コレ」

出来たよ。さすが悪魔の実。思いついた限りの自然現象を一通り試してみた。光・闇・地・火・風・雷・氷。地と火を合わせてマグマにしたりとかもできた。悪魔の実だし水は無理かと思ってたけど海水じゃなければ大丈夫っぽい。原作で見た技もやってみたら簡単にできた。光の速さで蹴ったら草原が荒野になった。

次に獣人系を試してみたがこれはできなかった。まあ、予想どうりだったのでスッパリと諦めて超人系を試してみることにした。

結果は一部のみ成功した。体を金属に変えたりとかは出来るのだがバラバラにして操ったりとかは無理だった。

他にも能力の使い方を色々考えてみた。

なぜか転移ができた。掌握した星の全域と視認可能な星に転移が可能なようだ。

斥力を纏うことによる防御フィールド。常時展開しておこう。

そして星化。これは自らの体を人の形をした星へと変化させる。悪魔の実を食べたときからずっと発動してたみたいだ。見た目は変わらないが、

・不老になる
・寿命が数億年以上になる
・食事や睡眠、呼吸などの人として生きていく上で必要なことが不要になる

・星にダメージを与える程の威力のない攻撃の無効化

と、もう無敵じゃね？な状態になる。ちなみに解除不能。

自分の能力はだいたい把握できたし、これからどうしようか。

せっかくの大海賊時代だし、海賊でもやってみようかな？でも海賊って具体的には何すればいいんだ？……やっぱり海軍にしようか。

飽きたら転移で別の星に行けばいいしな。せいぜい楽しませてもらおう。

そして俺は重力と風を操作して空を飛びながら海軍本部を探すことにした。

第2話

とりあえず海軍にでもはいろうか。

そう思い立ったおれは海軍本部を探してこの世界を彷徨ってるわけだが……。

「みつからん……。」

あっれぇ~？海軍本部ってシャボンディ諸島の近くだったよね？全然ないんですけど。

いや、シャボンディ諸島らしき島はあったんだよ。バカでかいシャボン玉がそこら中に浮いてるからすぐにわかった。でもなんか人がいないんだよね。魚人ならたまに見かけるんだが。

ふむ。考えられる原因としては、
?今が原作の始まるずっと前。
?そもそもここがワンピースの世界と似てるだけの全く違う世界。
と、こんなとこかな？

まあ、考えるのがめんどくさいので?だと仮定しよう。何百年かしたら合ってるかどうか解るだろ。

しっかし、原作のずっと前とはさすがの俺も予想外だった。原作を俺好みに好き勝手改変して遊びたかったのに……。

いつ原作始まるんだろ……。それまで俺はなにをして暇を潰せばいいんだ……。

そうだ！世界政府をつくろう！

でも自分でやるのはめんどくさいなぁ……。

最初に一人よさげな人材を見つけて全部そいつに任せちゃえばいっかな〜？

と言う訳で、その最初の一人だが、名前はファーゲルホルムと言うらしい。ぱっと見はただの一般人なんだが、異常なくらい強烈なカリスマの持ち主だ。

とある村で村長をやってたんだが、拉致ってきた。反抗的だったが、目の前で島ひとつ消し飛ばしてやったらおとなしくなった。

そんなわけで１０年程かけてそいつに世界中から人材を集めてさせてみました。

まかせっきりにしてたから詳しくは知らないんだが、皆がみんな、なにかしらのエキスパートらしい。

ぜひこの調子で頑張ってもらいたいね。

ファーゲルホルム達が頑張ってる間、暇つぶしに武器を作ってみることにした。

作るのは剣だ。刀も捨てがたかったが、切り裂く刀よりも叩き切る剣の方が俺に合ってるだろう。

今の俺は素手の方がずっと強い。

俺にとってはどんな名刀・名剣だろうとただの棒きれ以下だからな。だから強度をなによりも優先することにした。

武器なのだから俺の体よりは丈夫であるべきだろう。そうなると少なくとも星ひとつと同等以上の強度が必要になる。

俺はとりあえず近くの惑星を剣の形に圧縮してみた。ブラックホールになった。周囲の星を飲み込みそうになって滅茶苦茶焦ったが、なんとかブラックホールの操作に成功し、事なきを得た。

ブラックホール化しないよう細心の注意を払って何度も何度も星を圧縮し続け、ついに成功した。

うむ、素晴らしい出来栄えだ。これなら物理法則を捻じ曲げた甲斐があるというものだ。切れ味が微妙なのが難点だが……。

太陽を材料にすれば焼き切るとかできるかな?

もったいないので最初に作った方を改造して鞘と柄を作って、それに合うような刀身を作ることにしよう。

さすがに太陽を使い潰すわけにはいかないので、似たような星を探すのに結構手間取ったが、なんとか見つけることができた。圧縮にも成功。ついに俺専用武器の完成だ。レーヴァテインと名付けようと思う。

嬉しかったので試し切りのときに調子に乗って、いくつかの星を消

し飛ばしてしまった。

もとの星に戻ってきた。１０年くらい経ってたらしく、色々発展してるようだ。

なんか世界政府が出来てた。海軍まであるよ。まあ、まだ基礎があるだけみたいだが、今の文明レベルで、しかも１０年かそこらでここまでやるなんてねぇ〜。

いやぁ、ファーなんとか（名前忘れた）は、かなり優秀だったみたいだね。もしかしてこれが王の器ってヤツ？きっと覇気も覇王色に違いないね！

でも、なんか相当ストレス溜まってるらしくて、俺の事を神格化したアヤシイ宗教つくって好き放題やってたらしい。俺に向かって『おお！我が神よ！』とか言ってくるファー（仮）の目が濁ってて怖い。

あと、なぜか町の名前が聖地ファーゲルホルムになってた。え？マリージョアじゃないの？

聖地マリージョアに改名させました。ただ、俺が改名を強行したせいか知らんが、みんなが俺のことをマリージョア様って呼ぶんだ……。元の名前は思い出せないし、もうマリージョアでいっか。

よし！今日から俺の名はマリージョアだ！

第３話

この世界の人間って鍛えたらどこまで強くなるんだろう。ふと、唐突にそんなことを思った。

だってさ、いくら鍛えたって六式とか人間に出来るわけないじゃん？空中を跳ねたり、蹴りで鎌風を起こしたりとかさ、もう、物理法則？なにそれおいしいの？って感じじゃん！

その上覇気使ってさらにパワーアップできるんでしょ？どこまで強くなるのか気になってもしょうがないと思うんだよね。

気になるなら試してみればいいじゃないか！

と、言う訳で今俺は人間オークションの会場に居ます。もちろんＶＩＰ席だよ？

いやぁ、人間オークションってこの時代からやってたんだね~。まあ、俺がいるせいで原作からずれていってるからかも知らんけどね。

ちなみに俺は『海軍の歪みを正そう！』とか『エースを助けなきゃ！』とか、そういったことは一切いたしません。理由？面白くなさそうだから。

黒ひげは殺すかもしれんけどな。なんかアイツ嫌いなんだよね。

まあ、それはさておき今は人間オークションの真っ最中。鍛えがいのありそうなヤツがいるといいんだけどね。

う～ん……。なんかビミョーなのばっかだな……。

もう帰ろっかな。そんなこと思い始めたそのときだった、そいつが出てきたのは。

『続きまして、本日の取って置き！エントリー？２８！アディントン・メーヴィス！』

それは６歳くらいの少女だった。金髪金眼のその少女は、将来はさぞ美しくなるだろう整った顔立ちをしていた。

『つい先日我らが世界政府に楯ついた、軍事国家グラールの生き残りです！』

それだけなら、ここまで興味をひかれることもなかっただろう。しかし、この少女違った。

『し・か・も！な～～んとぉ！！唯一人生き残った王族なのです！まだ子供ですが、……』

ガクン！……ドサ。

いきなり司会が泡を吹いて倒れる。一拍遅れて会場のあちこちで同じように人が倒れていく。

「ガキの癖して覇気使いかよ……！」

しかもどうやら覇王色のようだ。こいつはイイ掘り出し物があった

もんだなぁ！嬉しくてたまらん！

「おい、そこのガキ」

ガキが驚いたようにこっちをふり向く。覇気でぶっ倒れなかったから驚いてんのか？

「お前、今から俺の奴隷な」

ああっ！逃げ出しやがった！言い方が悪かったかな？

まあ、いいや。過ぎた事を気にしてもしょうがない。さっさと追って捕獲しよう。あ、皆気絶してるし、あいつ逃げた事にすれば無料（タダ）じゃん！ラッキー！今日はなんかツイてるな！

さて、捕まえたらどうやって鍛えてやろうか？楽しみだな〜。そうだな、とりあえず手始めに……。

「洗脳でもするか」

「はぁ……」

わたし、アディントン・メーヴィスは今人間オークションにいる。客ではなく商品として。

なんでこんなことになったんだろうか……。いや、何故かなんて解

りきったことだ。全て父上が悪い。

思えばわたしの父はプライドだけが異様なまでに高いの愚物だった。それこそ子供のわたしでも解るくらいに。

いままでは良かった。母と兄・姉達が必死に国を導いてきた。勝手に軍備を拡張され、軍国化されてもギリギリなんとかしてきたのだ。これからもなんとかなると思ってた。

誰も構ってくれないのは寂しかったが、国が平穏ならそれで良いとおもっていた。

だが、そんな生活はすぐに終わりを迎えた。父が世界政府に喧嘩を売ったのだ。

それは世界政府に加盟を求められたときのことだった。いやなら断ればいいだろうに。あろうことか、父はなにを思ったかいきなり使者を斬り殺したのだ。

理由を聞くと、『自分を差し置いて世界政府と名乗っているのが気に要らないから』だそうだ。

これには家族一同、愕然とした。バカだバカだと思ってはいたが、まさかこれほどとは。怒りを通り越してもう呆れるしかない。

あわてて父を処刑して世界政府に謝罪したが、遅かった。あの使者は末席とはいえ世界貴族の一員だったらしい。こうして我が国の滅亡は決定した。

世界政府の戦力は圧倒的だった。自国の、仮にも軍事国家の兵がま

るで相手にならない。

事前情報からそのことを知っていたみんなはわたしに逃げるように言った。わたしも残りたかったが、寝ている間に母に雇われていたらしい二人の護衛につれていかれた。

そして今、人間オークションに出品されている。

「はぁ……」

護衛二人は最初から裏切る気満々だったようだ。国を出てから寄り道もせずに一直線にここに向かったのだから。

（どうやって逃げよう……）

逃げるだけならそう難しくないと思う。

わたしにはひとつ特技がある。生き物を気絶させることができるのだ。人に使うのは初めてだが、なんとかなるだろうという確信があった。

『続きまして、本日の取って置き！エントリー？２８！アディントン・メーヴィス！』

いつの間にかわたしの番になっていたらしい。気がついたらステージの上だった。

『つい先日我らが世界政府に楯ついた、軍事国家グラールの生き残りです！』

司会の人がわたしについて説明している。なんか嫌な感じ。いや、今はそんなことより脱出するタイミングを……。

『し・か・も！な〜〜んとぉ！！唯一人生き残った王族なのです！まだ子供ですが、……』

唯一人生き残った王族、そう聞いた瞬間、わたしの頭が真っ白になった。そうか、みんな死んじゃったんだ……。

「おい、そこのガキ」

声をかけられて正気に戻った。声のした方を向く。人がたくさん倒れている。どうやら無意識のうちに力を使っていたようだ。その中で一人だけ立っている男の人がいた。黒髪黒目のお兄さんだ。なんであの人だけ気絶しないんだろ？

「お前、今から俺の奴隷な」

逃げた。一心不乱に。なにあの人！ロリコンだったの！？きっとロリコンだから気絶しないんだわ！

しかし、わたしの必死の逃走むなしく、

「洗脳でもするか」

そんな不吉な声と共に意識が遠のいていった。

（ああ、ロリコンの上にそんな趣味のひとだったなんて……。わたしはそんな変態に捕まってしまうのね……）

薄れゆく意識の中で、わたしはそんなことをおもった。

第4話

人間オークションで手に入れたガキ、アディントン・メーヴィスを徹底的に鍛えることにした俺は、とりあえずファーに預けることにした。

アイツは俺を神聖視してるからな。良い感じに洗脳してくれるだろう。何か問題があったらそのときは俺が直々に電磁波を操って洗脳すればいい。

さて、ガキを預けた俺はというと、必要なものを揃えるため世界中を飛び回っている。と言っても必要なものは悪魔の実くらいだけどな。あ、あと修業場所の確保もしなきゃ。

悪魔の実も星の一部。探すのはそう難しくない。さっさと見つけて帰りますか。

と思ってたんだが、これがなかなか上手くいかない。いや、悪魔の実は結構簡単に見つかるんだよ。でも、目的の奴と違うんだよね。

さすがの俺も遠距離から悪魔の実の能力まで把握するのは不可能だった。そのせいで近くまで転移して調べなきゃいけない。おかげで欲しくもない悪魔の実を大量に入手してしまった。あとで売りさばくか。

俺が目的の悪魔の実を見つけた時には一か月ほど経っていた。トリトリの実　モデル不死鳥（フェニックス）、だったかな？確か原作でマルコが使ってた気がするヤツだ。

俺にはまだ修業場所の確保という仕事があるので悪魔の実はファーに渡して、ガキに食わせてから人間形態のまま不死性を発揮できるくらい能力を使いこなせるようにしておけと言っといた。

それにしても久しぶりに会ったファーのヤツ、またストレス溜まってるっぽいな。禿げてきやがった。

今度からファゲって呼ぼう。素敵なあだ名だろ？本人は泣いて喜んでたからな。

修業場所の確保がまた問題だった。一通り世界を周ったが、やはりこの星の一部じゃ限界があるな。一か月ほど見て回ったがよさそうなところが見つからない。

結局、しょうがないので適当に近くの星を使うことで妥協した。

悔しかったので世界中のポーネグリフを改ざんしてやった。

これで考古学者がポーネグリフから真実の歴史を知ることは永遠になくなったわけだ。まあ、そのかわりにオハラが滅ぼされることもなくなった。いつか違う方法で歴史が解き明かされる、なんてこともあるのかもな。

準備万端、さっそくガキを迎えにいこう。

そう思った俺は意気揚々とファゲに会いに行った。

「お久しぶりです、マリージョア様。このメーヴィス、今日という

日を待ちわびておりました」

いやぁ、ファゲは実に優秀だね。禿げてるけど。まさかたかが二カ月くらいでここまでの変化があるとは思ってなかったわ。

約二カ月ぶりに会ったメーヴィスはね、もうね、別人だった。

だってさ、初めて聞いた一言が「やめてくださいロリコンなお兄さん！今ならまだ引き返せます！わたし、誰にも言いませんから！」だったんだぜ？

それが今はどうだ？「私は間違ってました。そう、私はロリコンたるあなたに弄ばれるために生まれてきたのです。それこそが私の存在意義。さあ、今すぐにでも私を存分に使い潰してください」とか言ってるんだぜ？

アレ？変わってなくね？ファゲのヤツどんな教育しやがったんだよ？「あなた様の愛奴隷として相応しく在れるよう教育しました」とか言われても方向性が違うっつの！

でもまあ、俺に逆らうって訳じゃないし……、別にいいか。

そんなことより特訓だ！

プランは既に決まっている。

?悪魔の実を食わせる。

←

?人形態のまま不死性を発揮できるようにする。

←

?平行して

1、俺の能力で可能な攻撃（光・闇・地・火・風・雷・氷・毒）をローテーションしつつ常時食らわせ続ける。

2、重力を操作し常に肉体に負荷をかけ続ける。

そして耐性がついたら威力を徐々に上昇させる。

↓

?その状態で俺と戦闘訓練。

↓

?エンドレス。

と、こんな感じだ。

さすが俺、鬼畜すぎる。普通だったら耐えられないだろう。確実に死ぬ。

しかし！そのための悪魔の実、そのための洗脳だ！

まず肉体面は悪魔の実の能力でフォロー！死んでもすぐに復活！そのまま鍛え続けるぜ！

精神面は洗脳によって植えつけられた俺への偽りの忠誠心でフォローだ！すでに狂ってるんだったら更に狂ったところで別に大したことないだろ？

問題は寿命だが、これは悪魔の実の能力でなんとかなるだろう。不死鳥なんだし転生でもすればいいさ。

原作開始まであと750年くらいか？

それまで鍛えて鍛えて鍛えまくってやるぜ！

第5話

メーヴィスを鍛え始めてはや数百年。こんなことは予想外だった。
こんなハズじゃなかったんだよ。俺は生身でどれだけ強くできるか試したかったんだよ。
それが実際はどうよ？燃やしても凍らしても切り刻んでも雷落としても毒食らわせて重力で押し潰しても。
全部、覇気で対抗してきやがる。
俺が知る限り覇気の効果は
・周囲の人や動物を気絶させる
・悪魔の実の能力を無効化して攻撃・防御する
・武器に纏わせ、威力を上げる
の三つだ。
それなのにコイツときたら何故か、能力の無効化と覇気を武器に纏わせることが出来ない。
まあ、その代わりに自らの身体に覇気を纏うことで防御力や身体能力が異常に上がるのだが。
重力で負荷をかけるのは結構な肉体強化になると期待してたのに、常に覇気を纏うことであっさり攻略しやがったしな。
一度覇気を使わないように命じてみたんだが、どうやら無意識に使っているらしくどうにも出来なかった。

気に入らないのでどんどん威力を上げていったら、メーヴィスの覇気もどんどん強くなっていった。もう進化と言ってもいいくらいに。

というかコレはもう覇気じゃなくて違うナニかだろ。物質化まで成し遂げやがった。

生意気にも覇気で剣と鎧を作って完全装備してやがる。鎧の上に能力の蒼い炎を纏ってるのを見たときは不覚にもカッコイイと思ってしまった。

始めはライターの火くらいしか耐えられなかったのに、今じゃレーヴァテインまで使って焼き払いでもしない限り全くのノーダメージだ。防御だけなら俺以上かもしれん。光速の蹴りを普通に回避しやがるしな。

それにしてもコイツ、鍛錬開始から数百年経ってるのに見た目は15歳くらいから成長していない。寿命は悪魔の実の能力でなんとかなるだろう、とか思ってた訳だがコイツは覇気でなんとかしやがったようだ。

もういいや。このまま覇気を極めさせよう。俺はそう結論した。

メーヴィスを虐待して遊ぶのに飽きた俺は、適当に目に付いた星を数千個ほどを亜光速でメーヴィスへ殺到させたあと「回避禁止な」と言ってからもとの星に戻ってきた。

思っていたよりも時間が経っていたようで、もう既に原作の50年前くらいのようだ。

聖地マリージョアに戻ったんだが、数百年も留守にしてたせいか、天竜人に賊扱いされた。

しっかし、原作知識で知ってたけどアイツらウザすぎだろ。思わず何人か殺してしまった。

そして今、俺は海軍に囲まれている。

「無駄な抵抗はよせ！お前は完全に包囲されている！」

うるせぇなぁ……。

雑魚どもを覇気で気絶させるとかしたいんだが、実は俺、覇気使えないんだよね。まあ、その代わりに悪魔の身の能力が何故か覇気で無効化されないから別にいいんだけどね。

俺が黙ってると天竜人がギャーギャー喚き始めた。なんか「殺せ！早く殺せ！」とか「警告してる暇があるならさっさと殺さんか！」とか言ってるのが聞こえる。

「黙れよ」

めんどいので付近の重力を適当に上げてあげた。ふむ、立ってるやつは……3人か。

海軍は人材不足なのか？これくらい耐えてみせろよな！

それにしても、天竜人が地面とキスして様は爆笑モノだな。写真に残しておきたい。この世界写真ってあったっけ？

残った3人が斬りかかってきた。そのうち2人は無視だ。回避する必要ないし。最後の一人、おそらくこいつが今の海軍大将なんだろう。一人だけ覇気使いだ。

「……」

なにコイツ？ずっと無言なんだけど。え？技の名前叫んだりとかしないの？

雑魚の方はさっきから、「抜突！！」「斬空閃！！」みたいに叫んでるのに。てか、どっかで聞いたような技名だな、おい！

「なッ！」「バカな！あり得ない！」「……！」

俺が雑魚二人の攻撃をスルーしつつ、大将（仮）の斬撃をデコピンで弾いたらメチャクチャ驚かれた。

なんかいい気分だぜ！メーヴィスは大抵のことを「さすがはマリージョア様！」で流すからな。

ちょっとテンションが上がってきた俺は重力を更に強くする。大将（仮）もさすがに地に膝をつき、雑魚二人は地面にめり込んだ。一般海兵や天竜人に至ってはもはや血だまりにしか見えない状態だ。

「おい。お前。なんて名前だ？」

「……」

無視かよ！徐々にかける重力を増やしてやろう。

「無視スンナ。海軍本部ごと消し飛ばすぞ」

「……アウルだ」

態度デカイな。しかし一応質問に答えたのでちょっとだけ軽くしてやった。

「ではアウル。俺を今代のファーゲルホルムのところへ連れていけ」

もともと何百年かは戻らないつもりだったんだ。今回みたいになるのは予想していた。

権力もないよりある方がいいから対策を考えといた。

まず世界政府のトップにファーゲルホルムの名を俺に関する知識を継がせることにした。

一般的には世界政府のトップは五老星だがな。

ファーゲルホルムのことはかなりの上層部にだけ教えさせる。つまり知っている＝世界政府の重要人物ってわけだ。

「……どうして知っている？」

知らないわけないだろうが。

「俺の名前はマリージョアって言うんだぜ？」

思わせぶりに名乗ってみた。アウルは何かを察したようだ。なかな

か空気の読めるやつだな。

「！……失礼致しましたマリージョア様」

わかればいいさ。俺は心が広いからな。

「さあアウルよ、さっさと案内しろ」

第６話

アウルに案内された俺は今、神殿らしき建物の中にいる。どことなく厳かな雰囲気だ。

でもこの神殿、祀ってる神が俺なんだヨねえ……。聖マリージョア教だってさ。笑えるぜ。

「アウル大将。御苦労だった。さがってよいぞ。」

「ハッ！」

アウルは敬礼して去っていった。

目の前には１８代目ファーゲルホルム。なんとなく初代に似ている。てかアウルはホントに大将だったのかよ。海軍のレベルひっくいな～。

「お初にお目に掛かります。私が現教皇の１８代目ファーゲルホルムで御座います。ああ、まさか私の代で我らが神がご降臨なされるとは！お会い出来て光栄です、マリージョア様！」

おいおい、こんなとこまで初代に似なくていいんだぜ？

残念なことにコイツまで狂信者っぽいんだけど。しかも教皇とかなんだよ？パワーアップしすぎだろ。

「今回は申し訳ありませんでした。知らぬ事とはいえ愚民どもがあ

なた様に逆らうなど！赦されることではありません！直ぐにでも天竜人を殺し尽くしてご覧に入れましょう！」

うは！初代よりすげぇ！アイツだってここまでじゃなかったぞ！？

俺がいない数百年に何があったんだよ？

「そこまでしなくてもいい。ただ、俺のことは天竜人と海軍に伝えておけ」

偉そうな感じに言ってみた。狂人の相手はしたくないが権力はあった方が何かと楽だからな。適当にあわせとこ。

「我らが神がそう仰られるのであれば……。寛大なご処置に感謝いたします。では、私は早速皆に我らが神のご帰還を伝えてまいります。ただ、通達に数日掛かってしまいますが……」

「構わん。俺はメーヴィスを迎えに行ってこよう。戻ってくるまでには終わらせておけ」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

そう言って教皇は去っていく。

権力はもどったし、メーヴィスを連れてきたら原作までのんびりしてようか。

聖地に戻ってきた数日後のある日。

天竜人にからまれた。
それは俺とメーヴィスがシャボンディ諸島を観光していたときのことだった。
「おい、おまえ！」
うるさいなぁ。周りの迷惑考えろよ。俺はそう思いながら偉大なる航路(グランドライン)饅頭を試食していた。
「お、結構うまいな。これ一つくれ」
買おうと思ったが店主がいなくなってた。いや、すぐ横で膝をついている。
「おい！下々民の分際でわちしを無視するんじゃないえ！」
なんだ、天竜人かよ？邪魔だなぁ。さっさとどっか行けよ。
「マリージョア様。呼ばれていますよ」
え？俺を呼んでんの？ウザッ！不敬罪で殺そうかなぁ……。
そんな事を思いながら振り向くとすごいブサイクがいた。
「おまえ、なぜわちしを無視した？無礼にも程があるえ！」
「うわっ、こっち見んなよ。梅干しみたいな顔しやがって。気持ち悪い顔してんだからさ、これからは周りの迷惑考えてずっと俯いて生きていけよな」

ドン！ドン！！ドォン！！

いきなり撃ってきやがった。直ぐに隣のメーヴィスが反応し盾になる。別にあたってもなんともないんだけどね。

「ん？………おまえ、すごく美人だえ。気に入ったえ。よし、妻にしてやるえ！」

そう言ってメーヴィスに手を伸ばしてくる天竜人。コイツ、俺のモノに手ぇだそうってのか？

俺は反射的に天竜人の頭を殴っていた。手加減なしだったので見事に頭部が消し飛ぶ。しまったな、拷問できなくなっちまった。

周囲が静まりかえる。メーヴィスは妙にニコニコしてる。なんか気分悪いな……。帰るか。

「帰るぞメーヴィス」

そう言って歩き出す。途端に周囲が騒ぎ始めた。海軍大将が来るだとか喚いてやがる。来るわけないだろ。来ても死ぬだけなんだから。

３０年くらい経っただろうか？俺は今や天竜人にとって恐怖の代名詞となっていた。

それと言うのも、あの一件以来俺が天竜人ごっこを始めたからだ。

天竜人ごっこ。それは天竜人に対して天竜人っぽく振る舞うこと。

なんの連絡もなく唐突に始めたためかなりの天竜人が死んだ。まあ、俺は楽しかったし大した問題じゃない。

そんな訳で今日も俺は天竜人を虐めている。

「おい、そこのクズ。なにをしている？」

奴隷らしき3人を連れて、スキップでもしそうなくらい浮かれながら歩いている天竜人を見かけたので声をかけた。

こちらを向いて俺に気付いたそいつは途端に顔色が蒼白になる。

「も、申し訳ありませんマリージョア様！良い奴隷が手に入ったので浮かれておりました！なにとぞご容赦を！」

俺に気が付かない程に浮かれるって事は相当な上物だろう。

奴隷をよく見てみる。１２歳くらいの少女達だった。

人魚でもないし、そう珍しくもない。そう思って視線を外そうとしたとき俯いていた一人が顔を上げる。

目が合った。薄汚い襤褸を着ているが、かなりの美少女だ。ここまで美しいのはメーヴィス以来だな。それにしても何処かで見たような……。

「お前名前は？」

「……ボア・ハンコックと言います」

なるほどね、原作の蛇姫か。そういえば天竜人の奴隷だったんだっけ。すっかり忘れていた。

ちょうどいい。人手が欲しかったんだよ。

「お前ら、家事は出来るか？」

「少しなら……」

まあ全く出来ないよりいいか。メーヴィスは覇気以外はクソだからな。今までは俺が家事をしていたんだが最近ちょっと飽きてきた。

「お前らは今から俺の奴隷な。ついてこい」

帰ろうとすると天竜人に呼びとめられる。

「お待ちください！そのものらは私めの奴隷でして……」

ああ、そうだ。こいつを忘れていた。

「おい、ハンコックだったか？お前らでコイツを殺せ」

予想外だったのか皆がみんなポカーンとしてる。

「聞こえなかったのか？コイツを殺せと言った」

「し、しかしこの方は天竜人で……」

「おいおい、何を言っている。天竜人と俺の奴隷。どちらが上かなど解りきっているだろう？ さっさと殺せ。それともそいつの奴隷に戻りたいのか？」

俺の言葉で決心したのか、ハンコックは天竜人を殴り始めた。覇気も使っているようだが、力が足りないのかなかなか死なない。途中から他の二人も手伝い始めたがそれでも死なない。結局飽きた俺が焼き払った。

「さっさと帰るぞ。ついてこい」

帰り道。まずは自己紹介か。

「俺の名はマリージョアだ」

我が家へと向かいながら説明する。

「お前らの仕事は俺の身の周りの世話だ。主に家事をやってもらう。ああ、ついでにメーヴィスも世話してやれ。アレは俺の奴隷だが、生活力が皆無だからな。必要なものはそこらへんから適当に取ってこい。俺の名を出せば文句は言わん」

俺の言葉に驚いているような顔をする三人。

「あの……あなたはいったいどなたなんですか？ それに何故私たちを助けてくれたんですか？」

どなた？ 考えたことなかったな。役職とかないし。さすがに自分か

ら神とか名乗るのは恥ずかしい。どうしよう。

「黙れ。質問は受け付けていない。お前らはただバカみたいに俺に従っていればいい」

返答に困った俺はこう言った。面倒になったからだ。そのせいで三人が怯えてしまった。

「解らないことはメーヴィスにでも聞け」

結局三人のことはメーヴィスに丸投げすることにした。

第7話

俺はハンコック達の教育をメーヴィスに丸投げした。そしてメーヴィスはそれをファーゲルホルムら教会の連中に丸投げした。

今、我が家では絶賛洗脳中に違いない。

ああ、また狂信者が増えてしまうんだね……。そう思ったが出来れば教会には関わりたくない。

まあ、別にいっか。俺は深く考えずにスルーした。

しばらく家に帰るのは辞めよう。

アウルがいた頃の海軍はものすごくレベルが低かったが、原作はなかなか良い人材が揃ってた。だからそのうち勝手に強くなるだろうと放っておいた。

もうすぐ原作始まるし、そろそろ三大将がいてもいい時期だ。海軍もいくらかマシな強さになっているだろう。

そう考えた俺は海軍の視察を行う事にした。

ちなみにメーヴィスも一緒だ。後で三大将と戦わせてみようと思ってる。俺にはずっと負けっぱなしだから、どのくらい強くなったのかよく解らんからな。

視察を行うにあたって、海軍での階級を作らせた。俺は一応、一般人扱いだったらしい。自分でも吃驚だ。

階級は俺が大元帥でメーヴィスが大元帥補佐だそうだ。これからは海軍本部大元帥と名乗ろう。まあ、ほとんど名誉職で俺の直属の部下はメーヴィスだけ、メーヴィスにいたっては部下なしだが。

「はじめまして、マリージョア様。私は今回の案内役を勤めさせていただくセンゴクです。階級は元帥を勤めさせて頂いております」

へぇ。この時点でセンゴクが元帥やってるんだ？という事は三大将も既にいるのだろう。

「ああ、よろしく頼む」

センゴクの案内で海軍内を見て回る。

海兵の反応は両極端だった。

英雄でも見るかのような視線を寄越す者。

厄介者を見るかのような視線を寄越す者。

割合としては前者の方が多いようだ。結構無茶苦茶やってるのになんでだ？天竜人に制裁加えたからか？

視察は順調に進んでいく。

「センゴク」

「ハッ。何でしょうか？」

そろそろ本題に入ろうか。

「お前のところの大将とウチのメーヴィスで模擬選をやらせたいのだが」

「は？ いや、しかしそれは……」

さすがに渋るか。どうやらメーヴィスは俺の愛人とでも思われてるようだからな。

「責任は俺が取る。それに、そうだな……。もしほんのわずかでもダメージを与えられたなら、海軍に天竜人を裁く許可を与えよう」

天竜人ごっこも飽きてきたからな。ちょうどいい。

「！！……わかりました」

まあ、さすがにこれは肯かざるを得ないだろう。正義を掲げる海軍にとって天竜人はガンだからな。それを取り除けるなら大抵の事は許可するだろうさ。

「よし、決まりだ。早速準備に取り掛かれ」

用意された演習場はあまりに狭かった。普通ならこれで十分だろうがこれから戦うのは普通じゃない奴らばかりだ。

しょうがないのでマリンフォードの近くに新しく島を作ってやった。海兵達が驚いている。海底の地面を海面まで盛り上げただけなんだがな。

準備を終えた俺はセンゴクとともにＶＩＰ席で観戦モードだ。周りには海兵達もいる。

眼前の島ではメーヴィスと黄猿が対峙している。三人まとめてでも良かったんだがな。

「メーヴィス。殺すなよ。それ以外は好きにしろ」

「了解しました、マリージョア様」

俺達の会話を聞いた海軍側が色めきたつ。

「お〜〜……。言ってくれるねェ〜〜……」

原作では温厚そうだった黄猿だが、この頃はまだいくらか若いせいかちょっと頭にきてるようだ。

「準備はいいか？　いいならさっさとはじめろ」

俺の言葉を合図に戦闘が始まる。

カッ！！！

先手は黄猿だった。開始と同時に光速の蹴りが飛ぶ。

メーヴィスが光に飲み込まれた。海軍側で歓声が上がる。センゴク

も若干嬉しそうだ。

「助けなくてもよろしいので？」

「必要ない」

俺の言葉を証明するかのようにメーヴィスが光を切り裂いて出てきた。その身体には傷どころか汚れひとつない。

歓声が驚愕に変わる。まあ、そりゃ驚くか。海軍の最高戦力たる大将の一撃をまともに食らって全くの無傷なんだから。

いち早く驚愕から立ち直った黄猿が光線を連射し始めた。

メーヴィスはゆっくりと歩いて距離を詰める。光線をぺちぺち叩き落としながら。

「なっ！あ、あれはいったいどうなっているのですか！？」

どうって覇気を纏った手でただ弾いてるだけだろ？

次の瞬間、メーヴィスがかき消えた。まあ、ちょっと走っただけなんだが。

あり得ないくらい強化されてるせいで只のダッシュが光速超えてやがる。俺以外誰も見えなかったようだ。

これで剃とかできればいいんだが、残念なことに才能がないのか覚えられなかったんだよなぁ……。

一瞬で間合いを詰めたメーヴィスが抜き手を繰り出す。
黄猿は避けようとしたようだ。それ自体は良い判断なんだが、いかんせん遅すぎる。脇腹を軽く抉られていた。
とっさに身体を光に変えていたようだが、メーヴィスの覇気は平気で物理法則を無視するからな。たとえ光だろうとダメージを食らう。
やはり三大将まとめて相手させればよかった。これじゃあ、あまりにも一方的だ。面白くない。仕切り直すか。
「おい、センゴク」
センゴクはあまりの事に茫然としていた。
「俺の話を無視するなよ、クズが」
ちょっとイラッとしたので撫でるくらいの威力で殴ってやった。
「ガッ!?……取り乱してしまい申し訳ありませんでした。……何でしょうか？」
たらたら流血しながら聞き返すセンゴク。ちょっとスッキリした。
「いや、仕切り直そうかと思ってな」
「と、言いますと？」
「うむ。このままでは詰まらんからな。そうだな、一周間後にでも再戦しよう。今度は何人でも参加させて構わん。他の条件は今回と

同じだ」

「……わかりました」

さて、一周間暇ができたな。家には帰りたくないし、どうしようか?

第8話

蒼い空。白い雲。そして視界いっぱいに広がる海兵の群れ。

あれ？私囲まれてます？みなさんすっかり臨戦態勢ですね。

ああ。せっかくこんなにいい天気なのに……。なんでまた模擬戦なんか……。

「じゃあ戦闘開始な」

遠くからマリージョア様の声が聞こえて来る。

同時に前後左右から襲ってくる海兵たち。

突き出される槍や剣を蚊でも追い払うかのように適当にあしらいながら、私はこうなった原因、マリージョア様のいつもの気まぐれ発言を思い出していた。

「海軍にいくぞ、メーヴィス」

突然そんな事を言うマリージョア様。

「わかりました」

私は口ではそんな事を言いながら、内心ではまた面倒なことを……と思っていた。

もう随分とこの人と一緒にいるけど、いつもいつも思いつきで行動するのは辞めてほしい。振り回されるのは私なのだ。

この前も気まぐれで奴隷を三人も拾ってきたし……。拾ってくるのはいいけど自分で面倒見るくらいはしてほしい。まあ、結局は私も押しつけたのだし人の事は言えないのだが。

「しかし、何故今更視察など？」

気になったので聞いてみた。新しい遊びでも思いついたのだろうか？

「お前と海軍本部最高戦力を戦わせてみようと思ってな」

え？マジですか？正直勘弁して欲しい。そんな事したら隠し事してるのバレちゃうじゃん！

何時の日か下剋上を成し遂げるためにも、なんとかして隠し通したい。バレたら私のマリージョア様を屈服させよう計画が水泡に……。

「必要無いでしょう。いくら三大将といえども私と比べればそこらの海兵と大して変わりません。そんなこと、試すまでもなく明らかです」

「お前の意見は聞いてない」

一蹴された……！

黄猿を相手にだらだら戦ってたら仕切り直しと言われた。

仕切り直し？まさか私が隠し事してるのがバレた！？マリージョア様に制裁される！！と一瞬焦ったがどうやら違うらしい。なんだ、ただの気まぐれか。

しかし、後日再戦するとの事。ホントに勘弁して欲しい。

マリージョア様が一周間暇になったと嘆いてたのでさりげなくデートの誘ってみた。行き先はシャボンディパークだ。

意外と乗り気なマリージョア様。だが決して絶叫系の乗り物には乗りたがらなかった。なんでだろ？

途中、私を誘拐しようとした人攫いチームをマリージョア様が殲滅したりとかあったが、楽しい休日だったなぁ。

「大噴火！！」

ドォーン！！

至近から火山弾の直撃を受けた私は現実に復帰した。ああ、そうだった。模擬戦の途中だったっけ。

私が受けた命令は『殺すな』と、ただそれだけだ。なら、大威力の技は使えない。とりあえず覇気で雑魚を気絶させてから一人ひとり狩っていこうか。

そう思った私はすぐさま実行した。周囲の海兵がバタバタと倒れていく。これだけ大人数だとなかなか壮観だ。

自分で言うのもなんだが、私は覇気だけなら世界一だと思う。ほとんどの海兵を気絶させることができた。さすがに三大将や一部の中将、センゴク元帥は耐えたようだが。

なんか「覇王色だと！？」とか聞こえた。今更何言ってんの？この前だって使ってたじゃん。この人達は気絶させるときしか覇気の色が判らないのだろうか？

とりあえずは三大将だ。とにかく三大将は即効で無力化しなければならない。

マリージョア様は勘違いしているようだが、私は別に光速以上で動ける訳じゃない。ただそうであるかのように脳に錯覚させているだけだ。

自然系にダメージを与えられるのも同じように錯覚を利用したにすぎない。この前のは、脳に『腹を抉られた』と強く思い込ませることで、肉体にまでダメージを反映させたわけだ。

こんな力があるのはおそらく幼いころ洗脳されたせいだろう。洗脳自体は覇気で肉体強化できるようになったときに解除できたのだが、その時から覇気をこんな風に使えるようになった。

私にはこれ以外で自然系にダメージを与える方法がない。三大将はもちろん、おそらくは自然系の最上位であろうマリージョア様にもバレてはいけない。これに対抗されると攻撃が効かなくなってしまうのだから。

これが私の隠し事だ。今までずっと隠し続けてきたのだ、今回もなんとか乗り切らねば。

私は黄猿を探し、前と同じように接近してなぎ払う。黄猿はこの前負わせた怪我が治りきっていないのか動きに精彩が欠ける。さっさと倒してしまおう。光速で避けられたりすると面倒だし。

黄猿はとっさに手に持っていた光の剣で防御しようとしたようだが、かまわず光の剣ごとなぎ払う。先日、光になっていた身体を抉られたためか、身体は生身のままだった。おそらく戦闘不能だろう。

次は赤犬だ。どうやらさっきの火山弾はコイツらしい。全然効いてないのだが、さっきのでマリージョア様に弱いとか思われたくない。ちょっとだけ本気を出そうか。

私は手に覇気を集め、剣の形に凝縮していく。

「覇王剣」

名前の由来はそのまんま、私の覇気が覇王色だった事による。安直だが結構気に入ってる。

作りだした覇王剣に周囲が驚愕している。この反応も飽きたなぁ。

覇王剣を一振りする。赤犬が気絶した。

このままさっさと終わらせようか。

二振り。青キジが気絶する。

一人につき一振り。私が剣を一閃する度に一人ずつ気絶していく。

例外はない。

覇王剣で覇気を圧縮して斬撃として飛ばす。ただそれだけ。まあ、速度は軽く音速は超えてるし、自動追尾するけど。

こんなものは小技にすぎないが初見で破れるものでもないだろう。

もはや勝敗は決した。

早く終わらせて、またマリージョア様とシャボンディパークにでも行きたいなぁ……。

私はそんなことを考えながら無造作に剣を振り続けた。

第9話

「誰じゃ一体、わらわの通り道に子猫を置いたのは！！」

久しぶりに聖地に帰って来たらなんか変な女が子猫を蹴って虐めてた。

「なあっ！ウチのパイロンちゃんに何するアマス！！」

「ふん！天竜人如きがわらわに逆らおうというのか？」

「何を偉そうに！わたしが呼べば海軍大将が軍艦を連れてやってくるアマス！謝るなら今のうちアマス！！」

「なにをしようと無駄な事。わらわは何をしようと許される。なぜなら……そう、わらわが美しいから！」

そういって天竜人を見下す変な女。見下しすぎて逆に見上げてる。というかもうブリッジじゃね？

ものすごい美人なのに頭の方が残念なのだろうか？そう思って眺めてたら半ブリッジ状態のその女と目が合った。

「ああっ！あなた様は、もしやマリージョア様ではありませんか？」

振り返り、そう言ってこちらに寄ってくる変な女。あれ？もしかしてハンコックか？

「お久しゅう御座います、マリージョア様。わらわはこの四年もの

間、ずっとずっとあなた様の帰りをお待ちしておりました。一体どちらに行っておられたのですか？」

どちらもなにも、ずっとシャボンディ諸島で遊んで暮らしてたんだが……。

「そんな事はどうでもいいだろう。それより……」

そう言って天竜人の方を指さしてやる。そこには怒りのせいかぷるぷる震えてる天竜人がいた。

「なんじゃお前は？まだいたのか。もう帰ってもよいぞ。特別に今日の事は不問としてやろう」

ブチッ。そんな音が聞こえた気がした。

「ゆ、許さないアマス！！誰か！海軍大将を呼ぶアマス！この無礼者に目にもの見せてやるアマス！！」

「鬱陶しい……。わらわとマリージョア様の再開に水を差すな！メロメロ甘風（メロウ）！！」

そう言ってハート形のビームらしきものを放つハンコック。

ビシッ……。

天竜人が石化する。あれは……メロメロの実の能力か？

「お前、いつの間に悪魔の実なんて喰ったんだ？」

「悪魔の実？なにを言うのです！おそらくあの者はわらわのあまりにも美しすぎる姿を見たゆえに『いっそ石になってしまいたい』と思ったのでしょう。だから石になった。ただそれだけの事です」

あれ？原作より性格が悪化してね？もはや何を言っているのかよくわからんのだが。

「じゃあ悪魔の実は食ってないのか？」

「ええ。悪魔の実とは大層不味いのでしょう？そんなもの、好んで食べようなどとは思いませぬ」

う～ん……。嘘は言ってないみたいだが……。今度海に沈めて試してみようかな……。

久しぶりに我が家に戻るとサンダーソニアとマリーゴールドが出迎えてくれた。ただ、二人ともまるで親の敵のように俺を睨んでくる。

ハンコックの崇拝するような目とは実に対照的だ。

「おかえりなさいませ、マリージョア様。お一人ですか？メーヴィス様はどちらに？」

「メーヴィスは海軍に置いてきた」

とりあえず六式を本格的に覚えさせようと思ってな。きちんと教われば習得できる……かもしれないからな。

「そうですか。ならば……覚悟しろ！マリージョア！！」

そう言っていきなり襲いかかってくる二人。メーヴィスがいない今がチャンスとでも思ったのか？愚かな。

俺はサクッと重力操作でミンチにしようとしたのだが、ハンコックの方が速かった。

「お前達！マリージョア様になにをする！メロメロ甘風（メロウ）！！」

途端に二人とも石化する。姉妹相手に容赦ないな。まあ、結果的にはその行動が二人を助けた訳だが。

「我が妹たちがご無礼を……。この者達にはよく言い聞かせておきますので、なにとぞご容赦を……」

「構わん。だが、そうだな……。罰としてヘビヘビの実でも食わせてやれ」

原作ではヘビヘビの実の能力者だったしな。都合のいいことに、この前集めたヤツのなかにあったはずだ。

それにしても、なんでソニアとマリーはいきなり襲いかかって来たんだ？

ハンコックが身をていして妹達を洗脳から守ったとか？それでハンコック一人だけがやけに俺に懐いてて、逆にソニアとマリーは俺を憎んでると？

ふむ……。まあ、こんな感じだろうか。推測にすぎないがそれほど

的外れでもないだろう。

無駄なことを。教会の連中に関わっている限りはいつかは洗脳される。遅いか早いかの違いでしかない。

そして俺の奴隷である以上はここから出ることは叶わない。

俺もメーヴィスも面倒を見たりはしないから、必然的に教会に関わることになる。

俺は石化を解かれ、ハンコックに無理やり悪魔の実を食わされている二人を見ながらそんな事を考えていた。

結論から言うと俺は間違っていた。ソニアとマリーはハンコックを連れて逃げ出す事に成功した。

すっかり忘れていたよ、冒険家フィッシャー・タイガーの聖地襲撃事件の事を。

俺が帰郷した翌日、奴は聖地マリージョアを襲撃した。

第１０話

物に悪魔の実を食べさせられるなら、悪魔の実に悪魔の実を食べさせたらどうなるんだろ？

突然そんなことを思いついた俺は海軍本部へ行って、Ｄｒ．ベガパンクを探した。ぜひとも実験してもらいたい。

しかし、残念なことにベガパンクは見つからなかった。まだ海軍に入っていないのか、それとも俺に会いたくないのか。

原作開始直前にもう一度会いに行こう。その頃になれば海軍には確実に入ってるハズだしな。

聖地に戻ると一面火の海だった。え？なにこれ？

逃げまどう天竜人。天竜人を襲う奴隷達。天竜人を庇いながら奴隷と戦っている海兵達。

ああ、そうか。この頃だったたっけ？フィッシャー・タイガーが襲撃してくるのって。

それにしても奴隷達、いや、もう元奴隷達か。逃げるどころか思いっきり天竜人に襲いかかってるんだが。屈強な男から女子供まで寄ってたかって天竜人をリンチにしてる。

あれ？一部の海兵までさりげなく参加してね？

もしかしてアレか？俺が天竜人を虐めまくったせいで奴隷とか一般人とかの風当たりが強くなったのか？全然気が付かなかった。

俺は阿鼻叫喚状態の周囲をスルーして我が家へと向かう。ベガパンクに会った時のために、どんな悪魔の実があったのか確認しとかなきゃな。

「天竜人めっ！！我らの怨み、思い知るがいい！！」

突然、見知らぬ魚人が襲いかかってきた。

「いや、俺は天竜人じゃないから」

「む？そうか、すまなかった」

そう言って去っていく魚人。話の通じるいい魚人だな。

「走れ！！二度と捕まるな」

さっきの魚人の声が後ろから聞こえてくる。なんか、どっかで聞いたような台詞だな……。気のせいか？

目の前を二人の女が駆けていく。片方は人を一人担いでいた。おお、どさくさ紛れで人攫いか？随分と図太い奴がいたもんだな。

「急いでマリー！こんなチャンス二度とない！必ず逃げきらないと！」

「わかってる！早くしないとアイツが帰ってきちゃう！」

ん？良く見るとソニアとマリーじゃないか。何やってるんだ？

「おい、お前ら。何をしている？」

二人がこちらを向く。その顔は絶望に染まっていた。まったく、大げさな奴らだ。

「マリー！わたしが時間を稼ぐわ！！その間に逃げて！！」

「そんな！無茶よ姉様！敵う訳ないわ！！」

逃げたいなら素直にそう言えばいいのに。機嫌が良ければ逃がしてやるのにな。逃げたところで何処に行くのか知ってるわけだし。

むこうは必死なのだろうが、別に取り逃がしても構わない俺としては滑稽にすら感じてしまう。

「蛇突（ヘビースティック）！！」

蛇になったソニアが尻尾を突き出してくる。俺はそれを無造作に掴んでマリーへと投げ飛ばした。

「あうっ！」「きゃあっ！」

「貴様っ！なにをしている！？」

吹っ飛んでいく二人。俺はゆっくりと歩いてそれを追いかける。

後ろから声がかかる。さっきの魚人だ。

「何って……。俺の奴隷が脱走しようとしてたからな。ちょっとしたお仕置きだよ」

「奴隷だと？貴様は天竜人ではないのだろうが！嘘だったのか！？」

「嘘じゃあないさ。あんなクズどもと一緒にしてくれるなよ」

「天竜人をクズ扱い……。なるほど、お前がマリージョアか……」

あん？俺って結構有名なのか？

「俺を知ってるのか？」

「シャボンディ諸島で天竜人を殺しておいて、なんの御咎めもなし。有名にならない訳がない」

まあ、言われてみれば納得だな。

「お前、なんて名前だ？俺だけが知られてるのは不公平だろ？」

「……フィッシャー・タイガーだ。しがない冒険家だよ」

へえ、コイツがねぇ……。

「さて、目的は果たした。俺は退散させてもらおう」

突然そう言って脱兎のごとく逃げ出すフィッシャー・タイガー。

目的？俺との会話がか？

「どういうことだ？」

回り込んで逃亡を防いでから聞いてみる。俺はボスキャラ扱いだから逃げられんぞ。

「……時間稼ぎだよ」

冷や汗をだらだら流しながら答えるフィッシャー・タイガー。

時間稼ぎ？ああ、そういえばソニア達がいないな。話してる間に逃げたのか。あいつらもなかなかに強かだな。

「うおぉぉぉ――――――っ！！」

焦りが極限に達したのかフィッシャー・タイガーが特攻してきた。

それを蝿でも叩くように地面へと叩き落とす。

「へぶっ」

……コイツどうしようかな。起き上がれないように、鳩尾に足を乗せて体重をかけつつ考える。

……適当にどっかに飛ばすか。原作のくまみたいに。運が良ければ生きてるだろ。

そう決めた俺は足をどけて解放してやった。途端に逃げ出すフィッシャー・タイガー。

俺は踏み込みの瞬間を狙って重力をゼロにしてあげた。

ぴゅーーーーん。

そんな擬音が似合うくらい良く飛んだ。さすが魚人。すごい脚力だな。

さて、家に帰ってどんな悪魔の実があったのか調べよっと。

家に戻って倉庫を見るとすっからかんになっていた。悪魔の実なんて影も形もない。

「ハハッ……。火事場泥棒かよ……。やってくれる……！！」

くそっ！！それもこれもフィッシャー・タイガーのせいだ！次に会ったら殺してやる！

俺は八つ当たり気味にそう思った。

第11話

「なあセンゴク」

「ハッ！なんでしょうか」

「今って海賊が流行ってるんだろ？」

「いえ、流行りというのは……。まあ、大海賊時代とは言われてますが」

「俺、ちょっと海賊になってくるわ」

「ハッ！…………は？」

「確か政府公認の海賊があっただろ？王下七武海。俺をあれに入れとけよ」

ハンコックがいないから空席があるし、ちょうどいい。

マリージョア襲撃事件から十数年。結局ハンコックは戻ってこなかった。洗脳効果で帰ってくるかと思ってたんだがな。どうやら今は新世界に居るらしいが詳しくは知らん。

「ああ、そうだ。メーヴィスも連れていくから」

「いや……少々お待ちください！私の権限ではそのような事……」

「じゃあな。後はよろしく」

「そんな！ちょっと待って……消えた……。……ああ、頭が痛い……」

マリージョア襲撃事件。

俺はあれからずっと、悪魔の実を盗んだ奴らを探し出しては狩っていた。予想外に時間がかかってしまったが。

その間メーヴィスは海軍に預けっぱなしだ。さすがに十年以上本職に教わったおかげか、六式（っぽいナニか）を習得出来たようで何よりだ。

もうすぐ原作が始まる。とりあえずルフィに会ってみよう。後はそのときの気分で決めればいい。

そうと決めた俺はフーシャ村へと向かった。

「海賊王におれはなる！！！」

東の海のゴア王国。原作知識を頼りにその周辺を飛び回ってたら突然そんな声が聞こえてきた。

どっかで聞いたような台詞。もしやルフィか？

声が聞こえた方へ進んでいくと小舟が一艘。船には麦わら帽子を被

った男が一人。
どうやらあれがルフィのようだ。麦わら帽子被ってるし間違いないだろ。
ハイテンションで叫ぶルフィを見た俺は、ふと悪戯心がわいた。ちょっと能力使って驚かしてやろう。
光を操作して光学迷彩を展開。さらに風を操作して声以外の音、においが伝わらないようにする。
体温も変えて完璧にしたいところだが操作が難しくて上手くできない。勘のいいヤツには見つかるだろうが、この頃のルフィなら気付かれることもないだろう。
「おまえか？さっき海賊王になるとか叫んでたのは？」
「ああ、確かに叫んだけど。ん？だれかいるのか？」
ルフィは辺りを見回すが当然俺を見つけることは出来ない。
「やめとけ。いくら見回しても無駄だよ」
「なあ、なんで見えないんだ？」
「俺が能力者だからさ。ちなみになんの能力かは秘密だ」
「へぇぇぇぇぇぇ！！すごいな、おまえ！おれの仲間にならねぇか！？」

いきなりそれか？それにしても……仲間ねぇ？それもいいかもしれない。楽しければなんでもいいしな。どうしよう。

「ん～……、そうだな。このへんにアルビダって海賊がいるんだが、そいつを倒したら仲間になってやってもいいぞ。海賊王になるんだ。アルビダなんて雑魚、サクッと倒してみせろ」

「おうっ！わかった！約束だからな！」

風を操作してゴート島近辺に船を誘導し、アルビダの海賊船を発見。そしてアルビダを見たルフィが一言。

「おまえがアルビダか？ずいぶんイカついおばさんだな」

「「「!!!!!!」」」

ブチ切れるアルビダ。部下達がメチャクチャビビってる。

「撃てェ！！撃って撃って撃ちまくれ！！あのガキをブチコロスんだよ！！」

「「「へ、へいっ！！」」」

ドンドンと大砲を撃ちまくるアルビダの部下達。

「ゴムゴムの風船！！」

ルフィは空気を大きく吸い込んだ。身体が風船のように膨らんでい

く。

「なっ！　膨らんだ！？」

ぼよ〜ん。まるまると膨らんだ腹で砲弾を弾いていくルフィ。

「あいつ、砲弾を弾きやがった！！」

「ちっ！　ありゃ悪魔の実ってヤツかい！？　野郎ども！！　うろたえるんじゃないよ！　砲撃がダメなら接近戦だよ！！」

そう言って船を近づけてくろアルビダ。金棒を構えて突っ込んでくる気満々だ。

「ゴムゴムの銃！」

バキッ！……ボチャン。

適度に近づいたところでルフィが殴った。アルビダは回避も出来ず、一撃で昏倒。そのまま海に落ちた。

「手が……手がのびたぞ！！」

「アルビダ様が負けた！！　化物だ！！」

アルビダが負けた途端に逃げ腰になる海賊たち。

「なあ、アルビダってやつは倒したぞ？　これでおまえはおれの仲間だな！！」

嬉しそうにそうルフィ。そうだな、それもまた一興か。俺は迷彩を解除した。

「いいぜ。俺はマリージョアだ。これからよろしく頼む」

「長い名前だな……。よしっ！略してマリーだな！」

「………」

その略し方はないと思う……。っと、そうだ。コビーを忘れてた。確か航海士の真似事ができたはず。シェルズタウンまでの航海にいると便利だろう。

「おい、おまえら。航海士は誰だ？」

「は、はい！、おい、コビー！こっちに来い！」

眼鏡をかけた気弱そうな少年が出てくる。見るからにヘタレっぽい。

「そいつを貸せ。そうすれば見逃してやらんこともない」

「は、はじめまして！ぼくは航海士兼雑用係をしていたコビーと言います！」

「おまえ、なんか海賊っぽくないな」

「そ、それは……。釣りに行こうとしたら間違って海賊船に乗り込んでしまって……」

「おまえ、ドジでバカだなーっ。そのうえ根性もなさそうだしなー。おれ、おまえキライだなー」

「え…えへえへへへ……。そんなはっきり言わなくても……」

ルフィとコビーが話してるのを聞いて思った。コビーが成長する機会を逃してしまったな、と。

……まあ、いいか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3361l/

星を統べる者

2010年10月10日22時22分発行